

秀歌三十首十今年の収獲

横山未来子

暗きより出でてまぶしく泣く蟬を木洩れの光
が有めていたり 十月号・宇都宮とよ

用足しに行きたしという母幼かりし吾子を思

いつつ手を繋ぐなり

岡部 和美

貧しさに乏しさに耐へて世過ぎせし身に新し

きたタルソース

石井千恵子

君からの電話ある日は黄のシール先週はひと

つ今週はなし

小島 千佳

林檎箱、卓袱台、炬燵と変遷し文机持たぬ一

生良しとす

十一月号・斎藤佐知子

蛙に目鼻唇ととのいて田毎の隅に春の影た

つ

加賀谷 実

立ち去つても立ち去つても夕映えが腰かけて

いる白骨の椅子

山下 雅人

あくびしている間にコップ一杯の水が溜りぬ

蛇口よりいでて

梶尾 利徳

文末の顔文字かなし切実な想いはわたしだけ
の持ち物 塩野ゆり子

追憶は旅のことのみ景色みな青一色に塗りつ

ぶされて

十二月号・久家 基美

しのび寄る秋の気配に笹の海を分けて熊たち

徘徊すらし

八城スナホ

針山に針を戻して深呼吸 再度手に取る針は

冷たい

大塚 亜希

病室は廊下より明け少しづつ窓があかるみ朝

日射しくる

一月号・岡本 貞子

釘一つ打たぬ木造聖堂に磔刑のイエス十字架

の上

北澤 道子

うつむけば草の花また草の花名は知らずとも

秋の色なり

久松 宏二

あの頃を思へばいつも君ありき生きて残りし

者の貧しき

二月号・青木 信

横顔の冷たさを知り電灯の紐の影踏みふけて
ゆく冬 吉野美野里

雲海の湧きくるような寂しさに父の毛糸の帽

子をかぶる

倉石 理恵

澄みきつた夜空にひとは導かれ広場に出てて

サルサを踊る

三月号・服部 崇

陽のあたる坂の途中にドアがあるぬくなる

ほかなき人開く

雪野 真菰

大晦日の夜に電話来て一年を締めくくりたり

聴きたき声に

四月号・伊藤 一彦

われはもう神に若さを捧ぐることできず子の

硬き髪を撫でたり

大口 玲子

大方を整理し終へたる部屋にゐてさて思ひ出

は何としませう

古川 典子

青空の端を掴んで拭う顔 洗面台に穴ひとつ

ある

五月号・奥田 亡羊